

〈贈る言葉〉

玉田佳子先生

松 村 延 昭

玉田佳子先生は、1982年3月に同志社女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程を修了され、橘女子大学等で嘱託講師として教鞭を執られた後、1985年4月に同志社女子大学英文学科研究助手に就任された。その後、英文学科は今出川から京田辺キャンパスへと移転し、1994年に名称を英語英文学科と変え、さらに2009年には、学芸学部から表象文化学部の学科として再び今出川キャンパスに戻ってくるのだが、先生は英文科の長い激動の歴史を体現されてきた数少ない教員の一人である。

35年にも及ぶ同志社女子大学での先生の研究活動については、近代小説の父と呼ばれるイギリスの小説家、サミュエル・リチャードソンの『パメラ、あるいは淑徳の報い』や『クラリッサ』、ジェーン・オースティンの『自負と偏見』等を、当時の社会では表に出てこなかった女性の人生に焦点を当て、女性視点で分析された貴重な研究をなされてきた。英文学から英語教育へ変更する等、研究対象を変更する研究者が増えるなか、先生は一貫して18世紀のフィクションのなかに描かれる女性の生き方や、女性作家を追求してこられた。

2009年3月に、先生は関西大学から博士号を授与され文学博士となられる。同年5月には、『偽装する女性作家：十八世紀イギリス女性作家の戦略』を英宝社から出版され、当時の父権社会の中で、女性作家たちがいかに工夫を凝らして自分たちのアイデンティティーを主張していたか、また、結果として小説というジャンルの誕生にいかに関与したかを論じられている。現代に生きる女性たちには思いも寄らない状況のもと、懸命に自分たちの思いを伝えようとした女性たちの声を知ることのできる貴重なご著書である。

授業に関しても、先生は『自負と偏見』における諸々のテーマを取り上げたゼミを長年にわたり開講され、一つの作品を時代の変化に合わせて様々な角度から解説してこられた。女子学生にとって『自負と偏見』の普遍的魅力と先生のお人柄により、毎年多くの学生が登録を希望する人気のゼミだった。さらに、学生主任、教務主任、学科主任と学内における活動にも力を注がれ、同志社女子大学の発展に貢献してこられた。

最後に、先生に対する個人的思い出を述べたい。失礼を承知で言うなら、多くの教職員や学生にも共感してもらえと思うのだが、玉田先生は可愛い先生だなという印象を常に抱いてきた。会議で大きな流れが押し寄せてくるのに、流されることなく御自分の意見を述べられる芯の強さももっておられたが、大半は自分の意見を強引に主張されず、優しく思いやりをもって人に接して下さった。控え室でお会いしても、世間一般の話題や授業のことなどを、若い学生のように明るく生き生きと話され、いつも会話を楽しむことができた。わたしにとって、ほっとする癒しの時間であった。授業の合間のひと時をもう共にすることができないのは寂しいが、キャンパスの近辺に住まわれていることもあり、またお会いして、楽しい会話をかわすことのできる機会もあるかと期待している。

玉田先生、長年にわたる同志社女子大学英語英文学科へのご貢献、本当にご苦労様でした。また、私たち同僚とのご厚誼、本当にありがとうございます。